

2月24日、WAM助成事業の進捗報告および訪問支援の事例検討会を実施した。

進捗報告では、3月15日にWAM助成事業の報告会を開催すること、ならびに事業報告書を作成することを共有した。報告会では、事例報告およびパネルディスカッションへの登壇を改めて依頼し、報告書には当日発表いただいた事例内容を掲載させていただきたい旨を伝えた。

本助成事業は3月末をもって終了となる。そのため、現在各訪問看護ステーションで訪問支援を受けている利用者の保護者に対し、事業終了について丁寧に説明していただくよう依頼した。そのうえで、これまで築いてきた信頼関係と安心感を生かし、継続支援を希望される場合には、助成事業としての支援から医療保険による訪問看護へ移行することで、これまでと同様の伴走支援を継続できることを選択肢として提示していただくようお願いした。

本事業において最も避けるべきことは、「一過性で終わる支援」である。関係性が構築され、変化の芽が見え始めた段階で支援が途切れることは、本人・家族双方にとって大きな不安を生みかねない。だからこそ、必要なケースについては医療支援へ円滑に移行し、継続的な支援体制を確保することを強くお願いした。

保護者の方へのアンケート用紙の自由記述欄に、ある母親から次のようなコメントをいただいた。

「支援前は何をするにも気力がなく、友達もいないため楽しくなさそうに見えました。支援後は、少し表情が豊かになり、前向きになりつつあります。今も学校には行けていませんが、行こうという気持ちになっています。」

この言葉は、訪問支援によって生まれた関係性と安心感が、確実に子どもと家族の内面に変化をもたらしていることを示している。たとえ登校という結果に直結していなくても、「行こうと思える気持ち」が芽生えたこと自体が大きな前進である。この関係性を維持することこそが、次のステージへとつながる基盤になると確信させられるものであった。

進捗報告後には、訪問看護ステーションベストの担当スタッフより事例報告を行っていただいた。

本事例の特徴は、前任スタッフからの引き継ぎという特別なケースであった点にある。引き継ぎに際しては、正式な交代前から前任者とともに同行訪問を重ね、対象者との接触機会を設けた。その結果、関係性を段階的に移行することができ、引き継ぎ後も違和感なく訪問を継続することができたとの報告であった。

関わりの中で特に意識したのは、「あなたのことを知りたい」「あなたの好きなものを私も好きになりたい」という姿勢を率直に伝えることであった。その言葉をきっかけに、対象者は徐々に自らのことを語り始め、関係性が深まっていたという。

また、医療支援への移行に至った経緯についても説明があった。受診に消極的であった背景には、保護者が「子どもの状況をどのように説明すればよいか分からない」「どの医療機関を受診すればよいか判断できない」といった不安を抱えていたことがあった。そこで看護師が受診同行支援を行えること、医療機関の選定も共に検討できることを丁寧に説明した。その結果、安心材料が整い、病院予約の支援を経て受診へとつながった。最終的には主治医より訪問看護指示書が発行され、助成事業としての訪問支援から医療保険による訪問看護へと円滑に移行することができた。

本事例は、訪問による伴走支援が関係形成のみならず、医療への橋渡しという重要な役割を果たし得ることを示すものであった。